

教員氏名：櫻田 涼子（現代コミュニケーション学科／准教授）

1. 教育の責任（何をやっているか）

現代コミュニケーション学科に所属し、キャリア支援を目的とした学科必修科目「キャリアプランニングⅠ」「キャリアプランニングⅡ」「キャリアプランニングⅢ」を主担当、「キャリアプランニングⅣ」を副担当している他、ビューティ・ブライダルコースの必修科目「ブライダルビジネス」などを担当している。1年次ゼミでは大学教育の要となるアカデミックスキルの涵養を目的とし、批判的に作品を視聴、講読し、検討、議論を行っている。2年次では学生生活の集大成としてゼミ学生が卒業研究に取り組むために、資料収集、文献研究とライティングの指導を行っている。また、慶應義塾大学では非常勤講師として専門である文化人類学の講義と文献ゼミを担当している。これまでに、筑波大学、横浜市立大学、埼玉県立大学、南山大学、東洋大学、茨城キリスト教大学で非常勤講師として講義を担当した経験がある。

現在の主な担当科目一覧		
育英短期大学	現代コミュニケーション学科	キャリアプランニングⅠ～Ⅳ、ブライダルビジネス、ブライダルコーディネーター、国際文化論（異文化理解）など
慶應義塾大学	文学部	文化人類学特殊Ⅸ、社会学文献研究

2. 教育の理念（なぜやっているか）

専門分野との関連性 文化人類学を専門とし、マレーシア華人社会を対象に研究を行ってきた。研究者として取り組むテーマは学科におけるキャリア教育やブライダルビジネスなどの講義に直接的な関連性は低いものの、研究から得た知見を実践的な知識として教育現場に落とし込めるよう工夫している。たとえば、多岐にわたる研究テーマのうち、特に華人女性の子育てと就労の両立についての議論（添付資料 1）は戦後日本型ライフコースを当てはめることが困難な女子のキャリア選択における諸問題として関連づけて捉えることで、その特徴が明確になってきた。この論点は、国際学会において報告するなど新たな研究テーマになりつつある（添付資料 2）。また、ブライダル関連科目についても、これまで行ってきた東アジア地域における婚姻と親族関係についてのフィールドワークにより得

た知見や具体的事例を授業で紹介し、日本のブライダルビジネス分野の教育者では言及し得ないアジア圏の婚礼文化についての知見を学生が得ることが可能となっている。少子化によるブライダル市場の縮小が課題となっている日本において、インバウンド外国人観光客や国内に居住する外国人をも顧客として想定したブライダルビジネスを展開することは今後必須になると考えられる。その点で、欧米の婚礼文化に偏ることなく、アジア圏を中心とした実践的ブライダル文化の修得が可能なコースを提供することは、東アジア地域を専門とする文化人類学者でなければできない実践であると考えられる。

学生の学習に対する理念 文化人類学を学問的バックボーンに現代コミュニケーションにおける諸科目（コミュニケーション論Ⅱ、国際文化論など）を担当しているため、抽象度の高い議論になる傾向があり、学生にとっては理解することが難しいと感じるようである。そのため、抽象と具体を往還しながら理解につながるよう、学生にとってより身近なテレビコマーシャルや広告写真、音楽、文学作品、フィールドで撮影した写真や動画などを多用している。課題は安易な消費的文化的理解にならないよう、わかりやすい具体的事例で議論を終えるのではなく、そこから自らの問題についても敷衍して考える力を養えるような議論（自ら考える力）に繋げることである。

社会における大学教育の位置付け 短期大学は、専門教育を受け日本の地域社会を支える優秀な人材（特に女子）を輩出する高等教育機関であるが、その一方で、学生が自ら考えより良い選択を主体的に行う力を身につけることも重要であると考えられる。混迷する社会で生きる力を獲得するための教育を行いたいと考えている。

3. 教育の方法（どのようにやっているか）

具体的な教育上の実践や教材の工夫 分かりやすく主体的な学びを促進するために、担当する講義では以下の取り組みを行っている。

- 1) **多様な学生に対応した講義資料** 感覚（視覚・聴覚）優位の学生にはパワーポイント、読解理解優位の学生にはレジюмеが有効なため、講義を聞きながら理解が促進されるパワーポイントと事前に読むことで講義の理解が即される文章スタイルのレジюме二種を講義資料として準備している。それだけではなく、レジюмеを講義前

に Classroom にアップロードすることで事前学習に取り組みたい学生や、欠席したため自主学習を行いたい学生の双方のニーズにも応えることが可能となっている。

- 2) **フィードバックの実施** 講義で評価課題として学生に課すプレゼンテーションやレポートは必ずフィードバックを行う。フィードバックを行うことで、学生はどこに問題があったのか、どの点が良かったのか確認することが可能となり、次回以降の課題への取り組みに活かされると考える。
- 3) **コメントしやすい環境の整備** 講義では内容理解を確認する目的でリアクションペーパーを提出してもらうが、成績評価対象とはしない任意のコメントを提出する回も設けている。評価に直結しないため提出しない学生も多いが、なにか確認したいことがある学生や発言したい学生にとって自由に発言することが可能となる雰囲気や環境を大事にしている。また、リアクションペーパーやコメントに書かれた質問や疑問などは次回講義冒頭でフィードバックするように努めている。
- 4) **テキストの作成** ブライダル系講義では文化理解を目的としたテキストが日本ではほぼないため学科の特色に合わせコミュニケーションに特化したブライダルテキスト（参考資料 3）を作成した。また、卒業後の進路としてブライダル企業に就職した学生の声も盛り込み、他にはない実践的なテキストで学生からも分かりやすいと好評である。

4. 教育の成果（行った結果どうだったか）

学生の学習成果と学生による評価 教養系科目の場合、短期的学習成果がわかりにくいという課題がある。しかし、一生涯続く主体的な学びの基盤となる知識を得る機会とすべく妥協せずに講義を行っている。一例として、2023 年度後期に開講された「コミュニケーション論Ⅱ」の授業評価アンケート自由記述欄を参照すると、「多様性について考える授業がとても興味深く、これから社会人として生活していく上で役立てたいと感じた」という意見や「今後のためになることをたくさん学べました」、「必須（必修）で取らなければ学ぶことのできなかつた内容を学べて知識や物事に対する理解を深めることができました」といった今すぐ役には立たなくても、卒業後も礎となる知識や議論を身につけることができた」と記述する学生が複数いることがわかる。この科目は 2 年後期の必修科目であるため、卒業直前の時期に自律的に生きることを可能とする学びに着目して授業を行うことは、多

くの学生が 20 歳で卒業し社会人となる短期大学という高等教育機関においては非常に重要であると考えます。

5. 教育における今後の目標（これからどうするのか）

短期的な目標 特にゼミでは文化人類学の学問的特徴でもあるフィールドワークやフィールドノートを取り入れた長期的な取り組みを行っていきたいと考えている。コロナ禍と物価高の影響を受け、現在の学生の学びはどうしてもオンサイトで「手近なところで済ませる」ものに終始しがちである。しかし、異文化理解はなにも海外留学や海外研修によってのみ達成されるものではなく、身近な暮らしにこそ学びのヒントがあり、その視点が必要となる。可能な範囲で学生と共に歩き、見て、味わい、考える、多様な経路を大事にしたいと考えている。

中期的な目標 すでに述べた通り、現在、ブライダル分野の教科書はほぼないに等しい。この間隙を埋めるべく、学生との共同作業によるブライダルテキストを改めて作成したいと考えている。また、日本型キャリア教育の特徴を他国の女子教育とキャリア認識の比較研究として共同研究および論文としてまとめたいと考えている。

【添付資料】 ※全部又は一部の現物を省略しています。

1. Ryoko Sakurada 2015 “Working in the City and Rearing Children in the Hometown: Women-centered Relationships of a Patriarchal Chinese Family in Peninsular Malaysia,” pp.123-138, Ijichi Noriko, Atsufumi Kato and Ryoko Sakurada (eds.), *Rethinking Representation of Asian Women: Changes, Continuity and Everyday Life*, Palgrave MacMillan.
2. Ryoko Sakurada 2024 “I am still trying to figure out what I want to do: Career Education and Self-actualization of Female Students at a Junior College in Japan”, oral presentation in The 13th International Convention of Asian Scholar’s: Crossways of Knowledge, Airlangga University, Surabaya Indonesia.
3. 櫻田涼子・三浦哲也（編）2022 『ブライダル・コミュニケーション』育英短期大学現代コミュニケーション学科発行

（2024年8月28日現在）